

Title	政治社会学から見たモダニティ：社会運動論の展開を中心に
Sub Title	
Author	大石, 裕(Oishi, Yutaka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998.),p.10- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集Ⅰ：社会学におけるモダンとポスト・モダン
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政治社会学から見たモダニティ 社会運動論の展開を中心に

大石 裕

1. 「政治」概念の拡がりとは政治社会学

モダニティをめぐる諸理念が、政治学の領域においても「大きな物語」を用意したのは確かである。そうした「物語」の中心にあるのが、選挙制度を中心とする民主主義制度である。この制度は、これまで多くの批判を浴び、様々な修正を加えられながらも、とりわけ先進産業諸国においては、国民国家という枠内で重要な機能を担ってきた。そして、第三世界の国々にしても、その種の「物語」を共有することが期待され、それに基づいて、政治発展論や政治的近代化論が多くの研究者によって論じられてきたのである。

政治社会の民主化という「物語」は、一般大衆の政治参加に関連して、次のような機会を満たす制度を備えることを求めている。それは、第一に人々が要求を形成する機会であり、第二に個人的あるいは集団的行動を通じて、同輩市民や政府に対し、その要求を表現する機会であり、第三に政府の対応において、これらの要求を平等に取り扱わせる機会である (R.A.

ダール,1971=1981:6-8)。先進産業諸国、とりわけアメリカ社会では、選挙制度や利益集団の活動を通じてこれらの機会がかなりの程度生かされているという見解が、数多くの論者によって指摘されてきた。いわゆる多元主義論は、そうした論者によって構成され、そこでは主として可視的な政策過程が分析対象とされてきたのである。

ところが、こうした「物語」は、第三世界においては民主主義制度の受け皿となるはずの国民国家や、それを正当化する役割を果たすはずの国民文化それ自体の形成が順調に進まなかったことによって説得力を減退させてきたと言える。というのも、多元主義論では、「交通・通信網の発達が所属や忠誠心を重複・多元化させ、紛争は伝統的な社会的亀裂を越えて縦横に交錯し、多元化し、やがて新しい紛争解決のルール形成にいたる」(石川, 1994:10)と考えられていたからである。ここでは、近代社会の形成、国民国家の統合と安定、そして多元社会の成立といった目標の同時達成の必要性和可能性が主張され、近代化論、政治発展論、多元主義論は相互に関連し、補強しあいながら「物語」を作り上げていたととらえられる。

それに加えて、先進産業諸国においても、従来は社会的に不可視のまま政治化されることがまれであった社会問題が、様々な社会運動によって顕在化されるにいたり、この「物語」の有効性に対して疑問が投げかけるようになってきた。多元社会論によって描かれた政治社会においても、様々な理由によって政策過程から排除される個人・集団が存在して

きたことが明らかになったのである。エスニシティ問題はその典型である。

ここで注目すべきは、多元主義論に立脚する民主主義（論）という「物語」が、現実的側面において動揺させられる一方で、不可視の権力に対する注目という理論的変革によっても、その正当性が批判されるようになったことである。この理論的変革を端的に述べるならば、それは「目に見えない力が生活のなかで人を拘束する」力や、「（暴力装置やイデオロギー装置といった）装置がもつ力とは別に、装置を安定させる力が目に見えないところで働いている」（カッコ内、引用者）といった状況を重視する点に求めらよう（竹内、1994:13）。こうした観点に立つならば、従来の政治理論、とりわけ多元主義論の対象領域、ないしはそれと連動しつつ発展をしてきた行動論的政治学の対象領域が、著しく拡張されることが了解されよう。

そして、「権力をその社会的文脈において取り扱う」研究領域として、政治社会学をとらえるならば（T. ボットモア, 1979=1982:8）、政治社会学にしても多元主義論に基づく民主主義の「物語」、さらにはモダニティという「大きな物語」を所与とすることなく、不可視の権力についての分析を試み、それを通じてモダニティの再検討という作業に着手する必要があると言えよう。この時点において、「政治」概念はまさに拡がりを見せることになるのである。

モダニティの理念や民主主義を具現化してきた諸制度に対する異議申し立ては、これまでは典型的には社会運動として顕在化してきた。そうした「物語」に対する批判勢力として社会運動を位置づけることができるのであり、その重要性を認識しつつ研究を進めることは、「政治」概念の拡がりに対応するものである。そこで以下、社会運動論の展開について検討するなかで、政治社会学におけるモダニティの問題について考察を加えていくことにしたい。

2. モダニティの中の社会運動論

社会運動を最大公約数的に定義するならば、それは「公的な状況の一部ないしは全体を変革しようとする非制度的な組織的活動」ということになるろう（片桐、1995:73）。近代社会において社会運動は、知られるように、大別すると二つの系譜から研究が進められてきた（塩原、1976:222-232）。第一は、社会変動の原因もしくは結果として生起する社会的諸矛盾が、構造的な階級対立となって顕現し、さらにその解決としての闘争及び運動を惹起するという観点に立ちながら、運動を合法的に把握しようとするマルクス主義的な社会運動論である。第二は、ル・ボンなどの主張に見られるように、群衆の構成員である個々人が、群衆という集合的場の中に入り込むことにより、全体としては非合理的な行動として集合行動が生じると考える集合行動論である。

ここで留意されるべきは、集合行動論が集合行動を「あたらしい制度化の起点なのであって、運動の組織化過程がとりも直さず制度化の過程である」と把握している点である（同

書:230)。集合行動論では、一般の大衆がいく不安や不満が集合行動や社会運動によって社会的に表面化し、それが政策過程に反映され機会が重視されている。したがって、社会運動の組織化から制度化にいたる一連の過程は、多元主義論が主張する権力や支配の拡散という傾向に対応するととらえることができる。集合行動ないしは社会運動に関するこうした見解は、当然のことながら、マルクス主義的な社会運動論からは批判の対象となる。というのも、この種の社会運動論は、「究極的に、安定とは、理性の間の問題ではなく、力の問題である。敵対者とは和解不可能であり、真の調和という観念は、少なくとも階級社会にかんしては、欺瞞であるか、さもなければ幻想である」と主張するからである（R. ミリバンド,1977=1979:29）。

このように、これら二つの社会運動論は、モダニティという「大きな物語」の枠内にありながらも、マルクス主義と多元主義論という、それぞれの「物語」の中に社会運動を位置づけ、その機能について考察を加えるなかで自らの主張を展開してきたのである。

その一方で、集合行動論の系譜に位置しながらも、それとは異なる独自の視点から社会運動の分析を試みる資源動員論が、1970年代になってからアメリカ社会学の中から生まれ、多くの関心を集めるようになった。このアプローチの特徴は、次の点に求められる（M.N.Zald,1992:332-333）。資源動員論は、集合行動論において社会運動の発生要因と見なされていた人々の不安や不満をそれほど重視しない。そうした不安や不満は、どの社会、どの時代にも存在すると考える。そして、社会運動を概して合理的な運動ととらえ、その発生原因よりも展開過程を重視し、運動資源の動員、その際に採用される運動組織の戦略を分析の中心に据える。従って、既存の社会的ネットワークが社会運動組織へとどのように発展してきたかという問題、あるいは社会運動組織と他の組織との結びつきが重要な研究課題となる。さらには、マス・メディアや紛争当事者以外の社会成員の意見の集合体としての世論との関連も分析対象となる。というのも、これらの社会的ネットワークや他の組織、そしてマス・メディアや世論が、資源動員に当たって重要な供給源となるからである。

資源動員論は、当然のことながら多種多様な社会運動を扱っており、その点では民主主義という「物語」の問い直しをつねに行ってきたと言える。さらには、そこでは環境問題や女性運動など、民主主義制度のみならずモダニティという「大きな物語」そのものに挑戦を試みる運動も扱われてきた。ところが、知られるように、ある個人や集団が目標達成のために影響力を行使するにあたり諸資源を動員するという観点は、利益集団論と密接に関わる多元主義論においてもすでに採用されていた（R.A.Dahl,1991）。したがって、資源動員論の観点は、社会運動組織のみならず、様々な圧力団体の分析にも有効だと言えるし、資源動員論の用語や概念の使用法を見ると、その点はかなり意識されている。また、資源動員論の分析枠組みでは、先に見た集合行動論と同様、その組織化や制度化の過程が重視され、さらには社会運動組織の主張や利害が政策過程に反映される（あるいは、され

ない) 要因分析が重要な研究課題となる。以上の点からすると、資源動員論の方法論と問題関心は、多元主義論と共通する部分があり、それを補完する役割を担うと見なすこともできよう。資源動員論は、民主主義制度やモダニティの「物語」に対して挑戦を試みる社会運動をも研究対象としつつ、とりわけアメリカ社会学の枠内においては、そうした「物語」の再構築に関わるアプローチとして位置づけることも可能だと思われる。

3. 「新しい社会運動」論の視座

資源動員論とほぼ同時期、ヨーロッパ社会学を中心に、「新しい社会運動論」と呼ばれる研究が多くに関心を集めるようになった。それらの研究は、反核運動、環境保護運動、女性運動、さらには様々なエスニシティ運動を「新しい社会運動」ととらえ、その展開を主に扱うものである。ここで新しい社会運動という用語を用いるのは、資源動員論をはじめとする他の社会運動論とは異なり、このアプローチが社会運動を通じたアイデンティティの構築という問題を前面に掲げ、それらの運動にモダニティを超える意味を見出そうとするからである。それと同時に、新しい社会運動論は、ヨーロッパ社会においていまだ大きな影響力を有する、前述したマルクス主義的な観点とも一線を画している。そこでは、経済的要因による構造的な階級対立と関連づけて新しい社会運動の説明を行うという手法は採用されない。

また、新しい社会運動論は、従来の民主主義制度の限界を強く意識している点で、資源動員論とは異なる問題関心を有していると言える。というのも、資源動員論が、社会運動組織による政策過程への参入という問題を比較的重視するのに対し、新しい社会運動論は、「市民社会の諸制度に浸食する国家の統制に対する反撃を、媒介的機能を喪失した制度的な政治から離れたところ・・・私的空間と制度的・国家的政治空間に位置する『非制度的な政治の空間』(C.オッフエ)の創出によって実現しようとする」(伊藤,1996:136)動きの中に、新しい社会運動の位置づけを試みるからである。

次に、新しい社会運動論の特徴であるアイデンティティ重視という観点について検討してみる。このアプローチでは、アイデンティティという概念は、通常、(相互に密接に関連する)以下の3つの領域において研究対象とされてきた(H.Johnston et.al.,1994:10-20)。第一は、主として心理学者によって担われてきたもので、諸個人の社会運動への参加動機を主題にする「個人的アイデンティティ」の研究である。第二は、社会運動組織の成員の定義、組織の境界、運動組織のためにその成員が行う活動に焦点を合わせ、それらを通じたアイデンティティの社会的な構築を主題にする「集合的アイデンティティ」の研究である。第三は、社会運動の参加者や支持者の自己認識に関わる運動外部の人々が有する影響力を主題とする「公的アイデンティティ」の研究である。

このうち、新しい社会運動論は、他の二つのアイデンティティとの関連を視野に収めながらも、集合的アイデンティティの問題を中心に据えてきた。この領域の代表的論者であ

るA.メルッチは（ただし、メルッチ自身は新しい社会運動という範疇を設けることには批判的である）、資源動員論の研究手法に対して一定の評価を与える。その理由の一つとしては、メルッチが、「集合的主体が公共政策と対立し紛争状態になるときはどんなときでも、隠れていたネットワークが可視化される」（A.メルッチ,1989=1997:77）と論じるように、重要な動員資源の一つとして（潜在的であれ）既存の社会的ネットワークの存在を重視している点が指摘できよう。ただし、メルッチは、資源動員論が社会運動の参加者がアイデンティティを構成するプロセスを暗黙の前提としてしまい、そのプロセスに関する検証を怠っていると批判し、そのうえで次のように論じる（同書:29）。

「自己定義をし、行為の場を定義することのできる行為者のみが、期待を構成することができるのであり、現実との比較をすることができる。私が集合的アイデンティティと呼ぶのは、行為システムを構成するこのような過程の結果なのである。集合的アイデンティティとは、相互に交流している諸個人によって生み出される、相互作用的であり共有された定義である。」

メルッチは、集合的アイデンティティを重視するなかで、新しい社会運動を、「意味のネットワーク」ととらえ、運動自体が目標となり、また運動の形式そのものがメッセージになり、その結果、この種の運動が支配的コードに対する象徴的挑戦になると考えるのである（同書:64-65）。ここで重要なのは、新しい社会運動に備わるこのような特質、ならびにその種の運動に関するメルッチらの把握の仕方が、モダニティの理念の中からむつ出された様々な運動やそれに関する理解とは異なる性質を有するという点である。というのも、資源動員論をはじめとする社会運動論は、目標達成の手段として社会運動を位置づける傾向が強かったからである。

4. 小括

すでに指摘したように、社会運動（論）は、本来は民主主義制度という「物語」に対する批判という一面を有しているはずである。なぜなら、既存の民主主義制度の有効性を主張する多元主義論においては、「国民国家という単位にもっとも信頼を寄せ」、「そこでは、国民というデモスが過剰なアイデンティティを持つことによって、他の可能なアイデンティティを抑圧する危険性は不当に軽視されている」（杉田,1998:156）ととらえられるからである。また、新しい社会運動論を、モダニティの重大な帰結としての「消費主義がはびこった結果としての地球の汚染はもちろんのこと、消費社会においてなされている抑圧、差別、支配への抵抗を行ってきた」（D.ライアン,1994=1996:127）運動としてとらえるならば、この種の社会運動をモダニティという「大きな物語」に対する挑戦と見なすことも相応の妥当性を持つと言える。

ここで指摘しておきたいのは、こうしたモダニティに対する見方が、例えばメルッチが情報社会の到来を強く意識しつつ自らの運動論を展開していることから了解されるように、

ポスト・モダニティの社会理論と密接に結び付く点である(A.Melucci,1994)。前述したように、新しい社会運動論では、社会運動が物質的な側面での目標達成よりも、情報の共有によるアイデンティティの構築の側面が重視されており、その点ではモダニティの枠を超えた運動論が提示されていると見ることもできよう。他方、資源動員論では、社会運動にとっての情報の重要性を主張する論者も多数いるものの、物質的な側面での目標達成の手段、すなわち重要な動員資源の一つとして情報(ないしはメディア)を位置づける傾向が強い。したがって、資源動員論は、すでに指摘した多元主義論との共通性に加え、情報に関するとらえ方を見ても、ポスト・モダニティというよりも、モダニティ、あるいはハイ・モダニティの枠内にある理論と見なしうるのである。もちろん、このような基本的な視座の相違が、ただちに二つのアプローチの有効性を測る指標になるわけではない。ここではその差異を指摘するにとどめておく。

政治社会学の一領域としての社会運動論という立場から、最後に述べておきたいのは、やはり権力のとらえ方の問題である。本稿でも先に指摘したように、政治理論において権力に関する理論的変革が進み、その領域が日常生活や不可視の局面にまで拡大してきたことは、(政治)社会の非制度的な領域の研究にも携わってきた社会学の諸理論と接続することを促し、その理論的傾向は権力をその社会的文脈において取り扱う政治社会学、さらには政治社会学としての社会運動論にも必ずや影響を及ぼすに違いない。資源動員論、新しい社会運動論、いずれにしても(ハイ・)モダニティ、ないしはポスト・モダニティの権力論との連関を深めつつより一層の理論的展開を行うことが要請されるのである。

文献

- T.ボットモア、小山博也訳 1979=1982 『政治社会学入門』新評論。
 R.A.ダール、高島通敏・前田脩訳 1971=1981 『ポリアーキー』三一書房。
 R.A.Dahl, 1991, *Modern Political Analysis* 5th eds., Yale Univ, Press.
 石川一雄 1994 『エスノナショナリズムの政治統合』有信堂。
 伊藤るり 1996 「〈新しい社会運動〉論の諸相と運動の現在」山之内靖ほか編『システムと生活世界(岩波講座:社会科学の方法Ⅷ)』岩波書店、121-157頁。
 H.Johnston et.al., 1994, "Identities, Grievances, and New social Movements," in E.Larana et.al.eds., *New Social Movements*, Temple Univ. Press, pp.3-35.
 片桐新自 1995 『社会運動の中範囲理論』東京大学出版会。
 D.ライアン 1994=1996 『ポスト・モダニティ』せりか書房。
 R. ミリバンド、北西充ほか訳 1977=1979 『マルクス主義政治学入門』青木書店。
 A.メルッチ、山之内靖ほか訳 1989=1997 『現代に生きる遊牧民』岩波書店。
 塩原勉 1976 『組織と運動の理論』新曜社。
 A.Melucci, 1994, "A strange Kind of Newness" in E.Larana et.al.eds., *ibid.*, pp.101-131.
 杉田敦 1998 『権力の系譜学』岩波書店。
 竹内成明 1994 『顔のない権力』れんが書房新社。

M.N.Zald 1992 “Looking Backward to Look Forward,” in A.Morris and C.M.Muekkered, *Frontiers in Social Movement Theory*, Yale Univ.Press, pp.326-349.

(おいしい ゆたか 慶應義塾大学法学部)